「き、来たわよ・・・」
「あいかわらずすごい身体たまんないね」
「そ、そんなことないわよちょっと鍛えてるくらいで」
「鍛えててもそんなに胸はでかくならないよ」

ズウン
「早くしようか
オレもう我慢できない」
「い、いつも思うけど
す、すごい大きいわよね
あなたのそれ」
「それって？
ちゃんと言ってくれないと」
「ペ、ペ〇ス…」
「いいねえ、興奮する
今日は思いっきりヤリたい
気分なんだ」
「そ、そうなの？
思いっきり…？」

ズン
「ほらっ!!」
「んんんん!」
「もっと奥…までっ」
「んふっ!
んんんぶ…っ!!!!」

「ああ、気持ちいい・・・・」
「ん、んん・・・、んっ！」
ズポッ
ジュポッ
「もっと舌も絡ませて」
「ふ・・・っ、まっ・・・て、
く、苦・・・っ、し・・・
んんんん！」

「・・・ん、くっ」
「まだ先っぽの方しか
入ってないよ。もっと
ケツ落として」
ズリュプ
「け、ケツって言わないで
せめておしり・・・っ
んんん・・・っ」

「そうそう
あと少しで根元まで入る」
「ま、まだ最後まで
入ってないの・・・?」
「まだまだあるよ
ほら、もっとケツを
落としてくれないと」
「も、もう・・・
お、お、奥に・・・
ちょっと待っ・・・て」
「ったく・・・、仕方ないな」
ズズズッ

「ほらっ！」
「んんんんんん！！」
「ああ、凄い気持いい」
「お、奥に・・・・
ふ、深い・・・・
ん、あ、うっ・・・・」
「突き上げてあげるよ」
「ちょ、ちょっと待・・・っ」
ズンッ

「んっ！くっ！」
「ああ！！
んっ！ふっ…！」
「ほらっ！」
「んんんっ！
うんっ…！くっ」
パン
パン

「すごい跳ねてるね笑
もっと下から突き上げてあげるよ」
パンッ パン
パンッ
「あぁぁっ…！
そんなに…、強く
突き上げないでっ」

「ほらっ！ほらっ！
もっと！」
「あんっ！うんっ！
い、んっ！まっ！……
く…っ」
ブルン
ブルン
ドパンッ
パンッ
ズン

「少し、休ませて…
今日はっ激しすぎる…っ」
「え？
まだフェラと少し下から
突いただけじゃん」
「だけって…っ
んんっ…！くっ…
う、動かないで…」

「全然これからだよ」
ズン
「そ、そんな・・・
あん！あっ！うっ！」

「もっと激しく」
パンッ パン
パンッ
「!!!!!
んんんん!ふっ!」

「次は後ろから突くぞ」
ズン
「あああっ！
くっ…、ふ、深い…」

「あああ、すっげー気持ちいい
もっと突いていい？」
パンッ パン
パンッ
「も、もっとって…？
こ、これ以上は…
本当に無理…っ
し、死んじゃう…」

「おらおらっ！！
どうだ！もっと突くぞ！」
パンッ
パンッ
「あああああああっ！
うッあぁぁイクッ
イクっ…♡
っ、突いてっ！！」

「！
いいね～。春麗もこの激しさに
慣れてきたのか？」
パンッ
パンッ
「こ、こんなのに
慣れるわけない…！
で、でも、イクっ！」

「あああ、そろそろイキそう
ラストスパートだ！」
パンッ
パンッ
「！！！！」

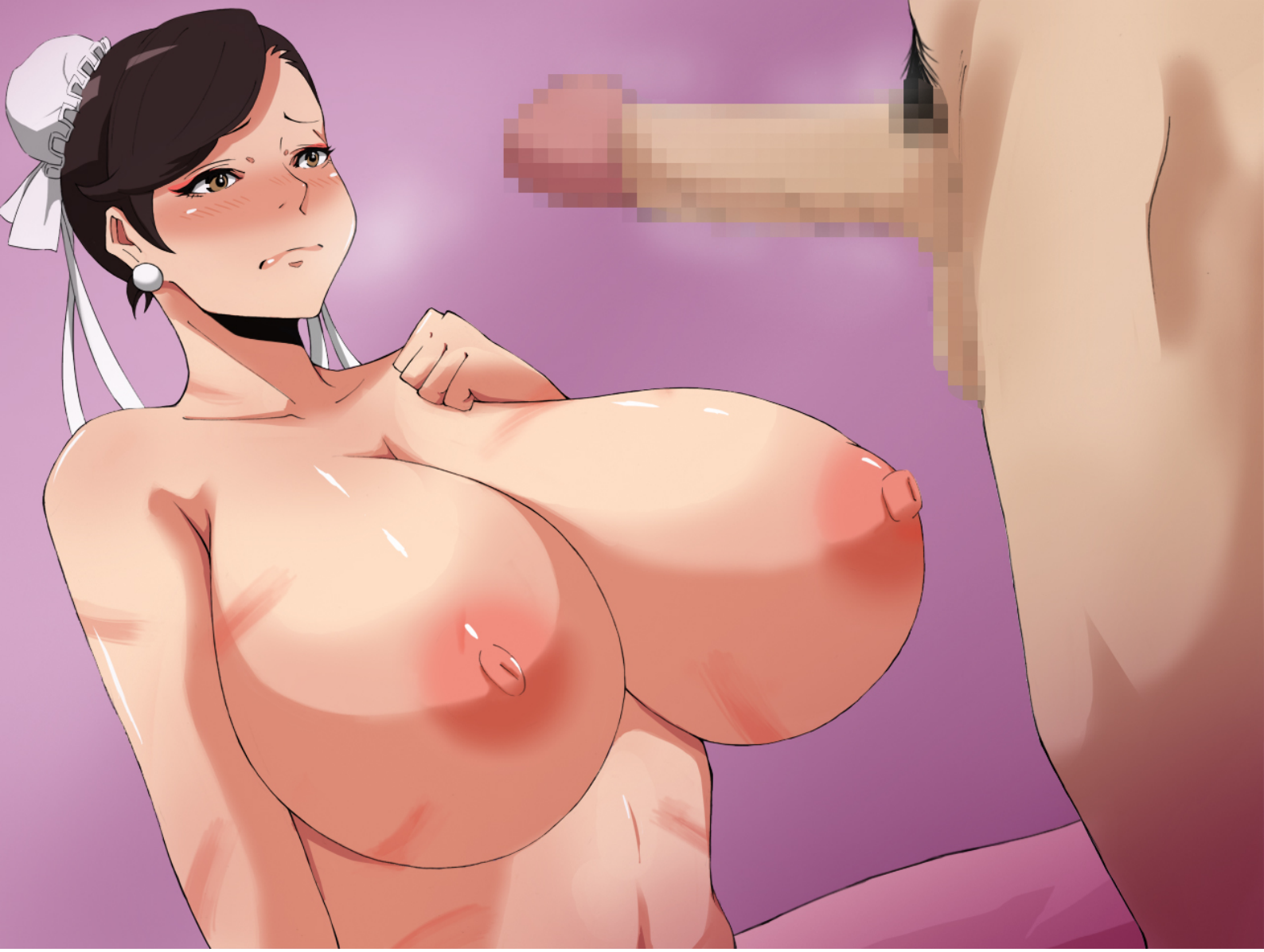
ドッパン パン
パン
ブルン
ブルン

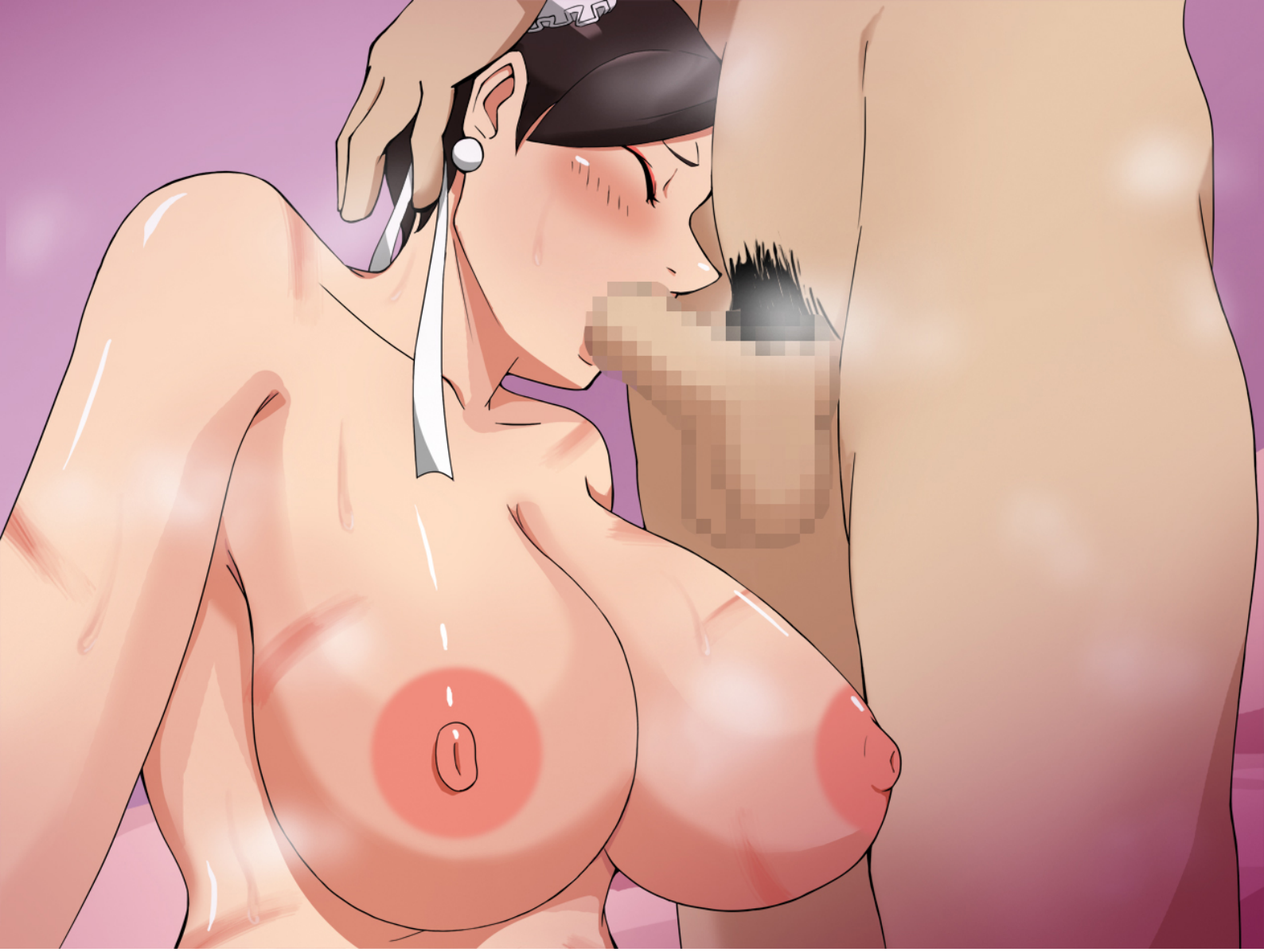
「イクっ！」
ビュルルル
ドク ドク
「あああああああああああああああああああああ！！！！」

「舐めてくれよ」
チュパ
「んんっ
く、む…」

「え、ちょっと…
お、終わったんじゃないの？
…んんん！！！」
「いやいや、あれだけで
終わるわけないじゃん」
ズズズ
「あれだけって…」

「夜はまだまだ長いよ」
パンッ
パンッ
ブルン
ブルン
「あああああああ♡
うッあぁぁ！！！」





「今日もするのね…」
「くくく、当然だろ
今日も拷問に耐えたみたいだが
セックスはどうかな？」
「あなたがやっているのは
セックスなんかじゃないわ」
「凌辱だと言いたいのか？
まあなんでもいいさ。さっそくしようか」